

『夜明け (06/02)』

午前4時過ぎ
森の中は一斉に
小鳥たちの囀りで
一杯になるんです
聞く事は出来ませんが
きっと昨日の夢や
今日の事を
話しているのでしょう

私は胸一杯に
大気を吸って
心に有るものを
吐きだすのです

太い杉の木や赤松も
古い桜の木もそれから
アカシアの樹も
まだ眠っているようです
上空はまだ白く
じいっと佇んでいると
2羽3羽と小鳥が
飛び交っていく

遠く見える山々の峰
見えだした空の青
夜の明ける気配に向かって
私は声にはならない
声を出して叫ぶ
私の生きを返して下さいと

森の小径は湿り
萌え出した木の葉は
露をおび
ゆっくりと大地が眠りから
起きだしている
その目覚めに呼応するように
辺りは一斉に
明るさが増してきている

『首のない母親 (06/07)』

戦争になると
首のない母親が
至る所で出現する

我が子を
抱きかかえながら
首だけが
吹き飛ばされているのです

しっかりと守った両の手が
硬くなつて
赤ん坊がその中で
泣いているんですよ
何日も何日も

どんな戦争もね
遊びなんかじゃない！
耐えられますか
村が全滅し
物の言わない
首の無い母親と
泣いている赤ん坊の
まっただ中を
響きを！ 昼夜の中を！
人生の道をあなた！
歩けますか？ 歩けますか？

『灯りの消えた家 (06/10)』

一つ一つ消えていく
家の灯りが消えて行く
眠りについた町並みは

明かりが消えた
深夜の世界へ佇んで

星の下できっと
楽しい夢を見ているのだろう
悲しみに泣いた瞳も
寝息の中へと
痛む心も眠りの中へと
町に練り広げられた
一日の出来事が静かに静かに
眠りについている

家の灯りが一つずつ
暗闇へと消えていく
町の明かりが消えていく
一日が無事に終えて
人は眠りについていく

『佇む家 (06/10)』

眠りについたら
町並みの家々から
聞こえてくるんですよ

いろんな響き声が
愛する響き

悲しい心
苦しみの声
悲痛の叫び
恨みの響き
神への祈り
感謝の念ずり
生きへの鈴音が
暗闇から
聞こえてくるんですよ
眠りについたら町並みから
伝わってくるのです
人の寝息の音が
聞こえてくるんですよ

『港 (06/14)』

暗闇の海原に浮かぶ
魔天楼の船は
キラリキラリキラリと
色とりどりの
イルミネーションを瞬かせ
星の煌めきに呼応している
その船の進む航路は
欲望と云う名の羅針盤に導かれ

暗黒の宇宙を進んでいる
人間だから出来る
仕業にはちがいないが
過去から未来へと
文明を崩壊し続け
一時も休まる時を知らない

魔天楼の船は
人の心を安息させる
泊るべき港も無いのだ
過去から未来へと過ぎる
時間の中で
泊ることも出来なく
休むことも出来なく
その霧笛は
苦痛の響きとなって
宇宙へと木霊していても
欲望と云う羅針盤を
人は捨てはしない
だが人は安息を求め
憩いの眠りを求めている

魔天楼の船に乗て
人は何処まで進むのであろうか
その航路の舵を

欲望と云う名の羅針盤から
人は何時の日に
開放されるのであろうか
いえいえ

そんな日は訪れはしないであろう
欲望と云う名の船に乗った
人類は宇宙を彷徨い
泊るべき憩いの港を
安息の日々が心を求めて
星の煌めきの中を
果てしなく流離うのであろう

『臓器のない村 (06/18)』

空はどこまでも澄み渡り
セブリアンブルーの色が高く有る
真綿の白雲は浮かび流れ
遠く地平線まで伸びた
野畑の茂みが風にたなびいている

村人たちは
日の昇りとともに
畑へと汗を流し
日没とともに

家々は燈火の下で
一家の団欒と憩う

おお母なる緑成す大地よ
おお豊かなるその大地の恵みよ

太陽の光りをさんぜんと浴び
文明より遠く離れた未開の地に
建設の槌音が響き渡る
村の家々は新しく建て代えられ
水道も電気も無い村に
どの家も自家発電がうなり
日課の水汲みは遠い思い出となった
電燈の明かりに
村人たちは人間の文明が香りを
忍び寄る夜の闇へ誇示した

村人たちの
臓器は片方が無かった
男も女も
臓器を文明に引き渡し
今日も
村の家が新しくなった

ああ人間の建てたる文明よ
ああ果てしなく幸福を求める人間よ

空は遠く遠く澄み聖(きよ)み
セブリアンブルーの色が高く高く
白雲は浮かび流れ
遠く地平線まで伸びた
野畑の茂みが風にたなびいている

『子供が消える文明 (06/21)』

いつだってどここの文明だって
行方不明の子供がいる

私たちの文明だってそれはもう
沢山の子供が行方不明になっている
一人の子供がいなくなつて
入院している男の臓器が甦つた

地位やお金を持っていてる人が
生きて行く事ができるのです

あなたの臓器は本物ですか

いつだってどこの文明だって
子供の行方不明は有った

子供が一人ずつ消える文明ってね
未来が一つずつ消えて行く事なのです

私たちの文明だって
それはもう同じなのですよ

End all 1995/06

人間の生きるって
動物よりも恐ろしいですか

人間が作りだしている文明が
怖く怖く受け取りますか

子供が消える社会は
動物の世界だって凄じいですよ

でもね慣れたらあなた

『雨 (07/02)』

人の苦しみが
泣いている
天の涙となって
降っている
降っている

雨の輪を一つ
ひとつと
大地へと落とし
生きる悲しさを
響かせている

きつときつと
いつの日にか
何時の日にか
青碧の天空へ
人の涙の

美しい花が
咲くのでしょう
沁み込んだ涙の

かずかずを
魅せるのでしょう

『虹 (07/02)』

何が悲しくて
雨よ降るのか
生きある物の
やるせの証か
一時のこの世
美しさを見せ
悲しみを教え
楽しみを喜び
生きの文様を
虹へと輝きて
雨は涙の光り
幾多の涙の跡
生きある物の
心の嘆きが涙
何が悲しくて
雨よ降るのか

『心 (07/15)』

渡りの鳥よ鳥たちよ
冬の場所へと
幾千里をも飛び
渡りの鳥よ鳥たちよ
夏の場所へと
幾千里をも飛ぶ
丸い丸い地球の上を
気流に乗って
こころよ人の心よ

回流する魚よ魚たちよ
北の海へと
幾千里をも泳ぎ
回流する魚よ魚たちよ
南の海へと
幾千里をも泳ぐ
丸い丸い地球の上を
海流に乗って
こころよ人の心よ

こころよ人間の心よ
時には海のマンタのように

巨大な愛情を醸しだし
時には大空の鳥のごとく
自由へと羽ばたき
丸い丸い地球の上で
生きある物の涙を
生きある物の悲しみを
宇宙の星々へと応えておくれ

『別れ(子牛) (07/18)』

じっと私を見つめている
私も彼を見つめていました
彼の大きな瞳は
美しく澄んでうるんでいました
私は渾身の力で殺すため
打ち降ろしました

彼はゆっくりと倒れ
いやいやしているように
震えている脚も止まりました

今でも夢を見るのです
焼かれている炎の中で

血走った赤い目が
私に「さよなら」を言っている
そんな夢を見て
深夜に起きる事があるんです

『背中 (07/20)』

みように背中が冷たいのです
まるで
死人が背後に佇んでいるように
目の前のガラス戸に
自分の顔が映っている
机からの上半身が
暗闇の中から私を覗いている
寒い身体が震えるほど
夏なのに
もう長くはないのかも知れない
楽しかった日々焼き付いた人の顔
私が死んだらどうなるのだろう
何も変わらず
日は照り雨は降り雪が積もり
花が咲き風が吹き
小鳥がさえずり雲が浮かび
何一つ変わらないであろう
海のような悲しみもいらぬ
ただねがわくば

もう起きることのない眠りで
あって欲しい起きることのない
眠りであって欲しい

『佇み (07/28)』

昔から今も人類が生まれる前よりも
この地球は宇宙に佇んでいた
天の川銀河太陽系惑星が一員として
宇宙の風に吹かれて

昔から今も人類が誕生するずっと前から
われらが惑星は宇宙に佇んでいた
太陽の光と宇宙の光を浴びて
天の川銀河中心をもう数回まわったか

死が佇みて問う
宇宙はどこから来てどこへ行くのかと
死が佇みて問う
宇宙の生命に永遠があるのかと

私は思わず問うた
死も宇宙の中ではないのですかと
私は死に答えた
宇宙の意思で生まれたのです

ずっと地球は宇宙の中で佇んでいる
消滅をひたすら何億年と待っている
地上の悲しみを蓄えながら
宇宙の根源に戻ることを待っている

『灼熱 (07/31)』

オレンジ色の火球は
早朝の地平線上に現れ
ギラギラ燃えなが
空の中を昇っている
地上をカラカラにすべくか
白灼熱となって真上から
大地を照らすつもりなのだ
生き物の夢も希望も
生き物の悲しみも淋しさも
すべて燃やしきるように
太陽が熱風が透っていく

End all 1995/07